

くじらのお墓 ～相浦川の和多津美神社に伝わる“三平くじら”の話～

わだつみじんじゃ

◎和多津美神社

2025年5月30日 佐世保史談会 垣田鉄郎

今回は相浦近辺の昔話ネタ収集のため「くじらのお墓」と呼ばれる場所へ伺った。

長崎県立大側相浦川の中州にある美しい**和多津美神社**である。

平戸藩が行った新田開発の成就を宿願するために建てられた神社である。

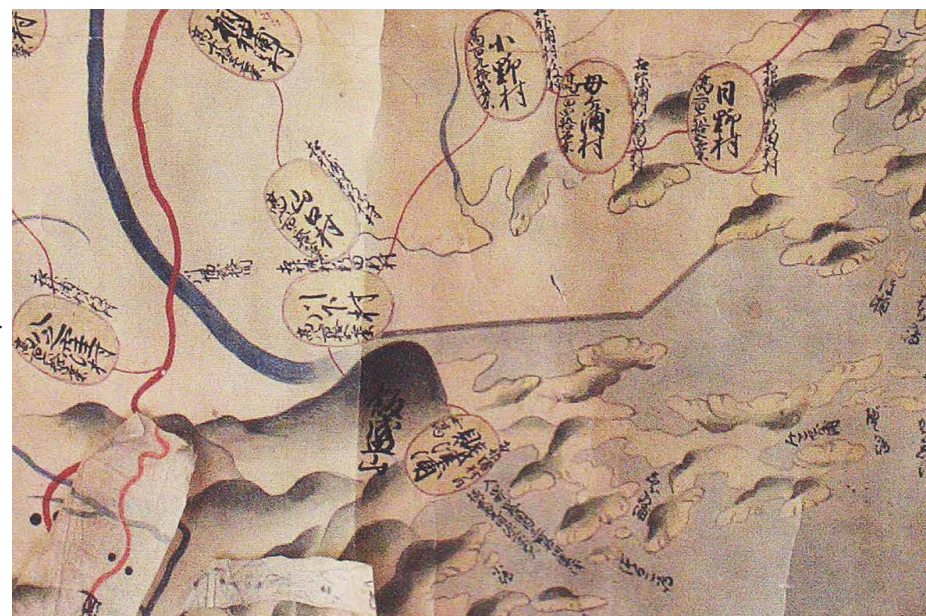
現在の総合グラウンドや県立大がある川下町一帯は江戸初期まで遠浅の海であり、平戸藩が明暦元年(1655)～寛文6年(1666)にかけて干拓工事を行い、広大な川下新田が造られた。その際に築いた築堤が何度も崩れたという記録が残っており、かなりの難工事であった事が分かる。

寛文年中、その堤防の上に龍王を祀り、築堤の安全と成功を願った事がこの神社の始まりと伝えられている。

正保絵図と元禄絵図を見比べると新田完成前と完成後の様子がよくわかる。



正保時代(1644～1648年)に製作された「正保絵図」



元禄時代(1688～1704年)に製作された「元禄絵図」 ※黒の線が堤防

◎くじらの石像と仮説

和多津美神社が何故「くじらのお墓」と呼ばれるのか？昔話のヒントになるようなものはないか調べに来たが、なるほど、よく見ると鳥居の脇に小さなくじらの石像があった。残念ながら尾の部分が欠けていて何処にも見当たらない。

たまたま近くで水門の開閉作業をしていた近所に住む70～80代の男性に話を伺ったところ、相浦の人はこのくじらの石像があることでこの場所を昔から「くじらのお墓」と呼ぶそうで、和多津美神社と呼ぶ人は少ないそうであった。という経緯でこのくじらの石像がここにあるのかは残念ながら分からないとの事であったが、石像は男性が生まれる前からあったとの事であった。



■仮説①

干拓後も何度か水害により防波堤が決壊したことがあり、それを鎮めるために鯨の石像を奉納した。ナマズをお祀りする慣習は主に地震の鎮めや水神信仰に関連しており、各地で様々な形で祭祀が行われている。それと似たようなことではないだろうか。

■仮説②

江戸時代、長崎の捕鯨といえば生月が有名ですが、五島と西海の間の五島灘でも捕鯨が行われており捕鯨されていた鯨の種類は、主にセミクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ、コククジラなどであった。

相浦には捕鯨の記録は見当たらないが、西海市、特に崎戸町では江戸時代から明治時代にかけて捕鯨業が盛んに行われており松島、江島、平島周辺が主要な漁場で捕鯨の町として栄えていた。

今の佐世保からも距離的にも近く当時の相浦湾に迷い込んできた鯨が湾内で力尽きて浜に打ち上げられた可能性がある。

おそらく江戸初期の干拓の以前、ここがまだ海だった時代に迷い鯨が打ち上げられて死んでいるのを見つけた人が石像を作りくじらのお墓として祀ったのではないか、当時としても珍しかったので特別人々の記憶に残って今に伝わっているのではないか。今では海からかなり離れていて川になっており鯨が打ち上がるなんて信じられないが、昔は海に面していた事を想像させる話である。

◎三平くじら

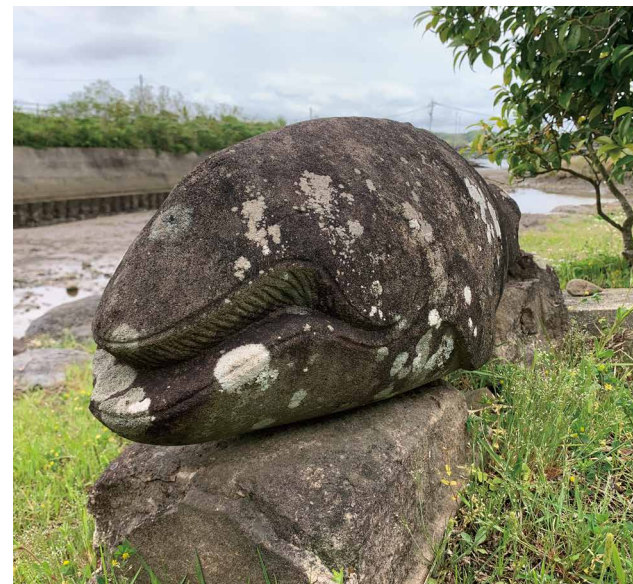
生月の「島の館」に電話で問い合わせたところ「**玄海のくじら捕り**」という書籍の中にこのクジラの石像のことが「**三平鯨碑**」として紹介してある事を教えていただいた。「玄海のくじら捕り」から抜粋した文章を下記に記載。

「玄海のくじら捕り」76ページより

編集・発行／佐賀県立博物館

発行年／昭和55年(1980)

尾の部分が欠損している石造の鯨の碑で、相浦川口に形成された中洲に位置する和田津美神社の境内にある。この鯨碑は昭和初期に製作建立されたもので、突風によって相浦川口の浅瀬に打上げられ捕獲された鯨を記念して、この地域の人々が奉納したものである。また、同時にこの突風によって遭難した青井三平氏の化身として、現在でも青井家によって祭りが続けられている。



さらに調べたところ1999年4月30日の長崎新聞の記事に「三平くじら」の事が掲載してあった。下記に記載。

長崎新聞に掲載されていた記事より抜粋

平成11年(1999)4月30日発行の長崎新聞

境内の鳥居のわきに、鯨をかたどった石碑がある。大きさは約60cmほどで残念ながら尾は欠けている。文字は刻まれていないが、地元の人によると大正14年(1925)、10メートルを超える一頭の鯨が河口近くの岩間に挟まり、捕獲された。早速、浜で解体され食卓に上がったという。この数日後、漁に出たまま行方不明となっていた「三平さん」が遺体で見つかった。そこで三平さんと鯨の冥福を祈って石碑が造られたとされ、「三平くじら」とも呼ばれている。

◎まとめ

2つの記事の内容をまとめると

大正14年(1925)。相浦川の河口近くで、突風により岩間に挟まり打上げられていた10メートルを超える鯨が捕獲された。早速、浜で解体され食卓に上がったという。

その数日後、漁に出たまま行方不明となっていた青井三平氏が遺体で見つかった。鯨と同じ突風によって遭難したようであった。そこで三平氏と鯨の冥福を祈って、昭和初期に石碑が造られ建立し、青井三平氏の化身として「三平くじら」と呼ぶようになった。昭和55年発行の資料によると現在でも青井家によって祭りが続けられているとのことである。

本当に鯨がここまで来るのだろうか？との疑問もあったが、生月の「島の館」に訊ねると相浦に鯨が漂着することは有り得るということで、対馬海峡から五島と西彼半島の間、五島灘にかけての海域は春に北上する鯨が通るルートで、捕鯨が盛んに行われていた。嵐など様々な要因でルートを外れ遭難したくじら(よりくじら)が佐世保の沿岸に打上げられることは十分有り得る。事実、佐世保市高島の志賀神社にもクジラの石像があり、大正時代に島に大きなクジラが漂着し高値で売れたため島民が潤ったことを記念して造られた。という相浦のくじらの石像と時期も同じで似たようなエピソードがある。

結論として、私の仮説①で述べた新田開発に由来するものではなかった。仮説②で述べた事に近い内容ではあったが、実際にクジラが捕獲された時期は新田開発以前ではなく、思っていたよりは新しい時代で大正14年(1925)の出来事であった。そしてその翌年には昭和が始まるのでその時期(昭和初期)に石碑が造られ建立されたということであろう。

何よりも考えもしなかったのは、人の供養も込められていたという事である。「三平くじら」と聞いた時には意味がよくわからず土地柄で鯨の呼び名があるのかとも思ったが、実在した人の名前だとは驚きだった。

打上げられた鯨と漁に出て命を落とした三平氏の御魂を供養するために鯨碑を造り奉納したのであった。

そして「三平くじら」と呼ぶことでいつまでも三平さんのことを忘れないようにと青井家ほか地域の方々が願ったのかもしれない。

今ではくじらの石碑を「三平くじら」と呼ぶ人はほとんどいないが、「クジラのお墓」の名称で相浦の人々から特別に大切にされている場所であることに変わりはない。